

名詞轉換動詞に用いられる目的役割の傾向について

増渕 佑亮

1. はじめに

転換は何の接辞も付加せずに品詞が変化し、意味もその品詞に合わせて変化するという現象である。次の例を見てみよう。

- (1) a. I hammered the metal flat.
b. On the eve of his departure for Bombay, grateful friends showered the Gandhi family with gifts of gold, silver, and diamonds.
c. A quarry digger may phone him.
d. Comb your hair.

通常、接辞が語彙の品詞と意味を変化させる。しかし転換の場合には、そうした変化の引き金となるような目に見える要素がない。(1)の例では、本来名詞であるはずの **hammer** や **shower**、**phone**、**comb** といった単語が、動詞化する接辞を一切付加されることなく、動詞として使われている。それでは、こうした転換によって出来上がる語彙の意味はどのように形成されるのだろうか。本稿では、名詞から動詞への転換に焦点を当て、その意味形成がどのように行われているのかについて考察する。

2. クオリア構造

クオリア構造は、Pustejovsky (1995)で提案された意味表示であり、4つの役割によって構成される。

- (2) CONSTITUTIVE : the relation between an object and its constituent parts ;
FORMAL : that which distinguishes it within a larger domain ;
TELIC : its purpose and function ;
AGENTIVE : factors involved in its origin or “bringing it about”

(Pustejovsky 1995: 76)

クオリア構造のそれぞれの役割は、CONSTITUTIVE は構成役割、FORMAL は形式役割、

TELIC は目的役割、AGENTIVE は主体役割と日本語では訳される。構成役割は、そのものを構成している成分やパーツに関する知識を記載する部分である。形式役割は、そのものがどのようなカテゴリーやタイプに属するのかを記載する部分である。目的役割は、あるものを人間がどのように使用するのか、またある人間や動物が典型的にどのような動作をするのかに関する知識を記載する部分である。主体役割は、誕生や発生に関する知識が記載される部分である。具体的な例を使って、確認してみよう。(3)は、sandwich のクオリア構造である。

(3) sandwich

構成役割：{bread, ...}

形式役割：physform (x)

目的役割：[w] eat [x]

主体役割：[z] make_activity [x]

(Pustejovsky and Jezek 2008: 5)

サンドイッチは、パンと卵、ハムなどの具で構成される。構成役割には、そのような情報が記載される。また、それは physical form、すなわち具体物である。形式役割は、「それがどんなものか」に関する知識であるから、サンドイッチであれば、もう少し具体的に食べ物といった情報も記載されうる。そして、サンドイッチは eat するためのものである。こうしたその物の使用目的や本来的な機能に関する知識が目的役割には記載される。また、サンドイッチは、人が make することによって誕生する。このような誕生に関する知識は主体役割に記載される。

本稿では、このクオリア構造を使って名詞転換動詞の意味を分析する。また分析対象を目的役割を利用したもの限定して論じることとする。

3. 先行研究

影山 (1999)や由本・影山 (2011)では、目的役割が一部の名詞転換動詞の意味形成に関与しているということが指摘されている。影山 (1999)の例を見てみよう。

- (4) a. She combed her hair.
b. He bandaged his ankle.

(影山 1999: 84)

(4a)の **comb** は元々「櫛」という意味であり、名詞転換動詞の意味はその使用方法に関する知識が利用され、「櫛で梳く」という意味で用いられている。また、(4b)の **bandage** は元々「包帯」という意味であり、名詞転換動詞ではその使用方法に関する知識が利用され、「包帯を巻く」という意味で用いられている。ある物の機能や使用方法に関する知識は、クオリア構造では、目的役割に記載される情報である。したがって、(4)の名詞転換動詞は目的役割を利用して、意味形成を行っていると言える。

影山 (1999)や由本・影山 (2011)は、名詞転換動詞の核となる動詞の意味情報が、名詞のこういった部分から出てきた情報なのかを指摘したものである。しかし、目的役割であれば必ず名詞転換動詞の意味に利用できるというわけではない。次の例文を見てみよう。

- (5) a. *I coffee every night.
b. *I sandwich every morning.

(5)の例文の名詞転換動詞の元となった名詞 **coffee** や **sandwich** は、明らかにその使用方法として、目的役割に **eat** や **drink** のような情報を持つ。しかし、(5)の名詞転換動詞がこれらの情報を使用して意味形成をすることは、基本的にはない。それでは、どのような目的役割であれば、名詞転換動詞の意味形成に関与できるのだろうか。次節から、この点を明らかにしていこう。

4. 目的役割の種類と名詞転換動詞

Pustejovsky (1995)によれば、目的役割は次の2種類に分けられる。

- (6) a. PURPOSE TELIC
something which is used for facilitating a particular activity
b. DIRECT TELIC

something which one acts on directly

(Pustejovsky 1995: 99)

Purpose TELIC は、目的役割に記載されている動作をするために、動作主の手助けをするような働きを名詞がしているような場合である。先行研究で目的役割が関与していると分析されている例は、Purpose TELIC を利用している場合が多い。次の例を見てみよう。

- (7) mop the floor (モップで床を拭く), sponge the window clean (スポンジで窓をきれいにする), bat the ball (バットでボールを打つ), hammer the nail into the board (ハンマーで釘を板に打ち込む), knife the man (ナイフでその男を切りつける)

(Clark & Clark 1979: 776)

(7)の例はいずれも、動作主が転換前の名詞の意味する物を使用して、動作を行っている。すなわち、Purpose TELIC を用いて意味形成を行っていることになる。

一方で、目的役割の情報内で対象の名詞が被動作主となる Direct TELIC を利用して意味形成が行われる例はほとんどない。Direct TELIC が利用されているように見える例も、Purpose TELIC の方を意味の中心として取っていることが分かる。由本・影山 (2011)の例を見てみよう。

- (8) a. She buttered the bread with cheap margarine.
b. *She buttered cheap margarine on the bread.

(由本・影山 2011: 204)

由本・影山 (2011)は、名詞転換動詞と共に用いられる前置詞句を根拠に、名詞転換動詞 butter の意味は「バターをぬる」ということではなく「バターで味付けをする」というような意味であるということを実証している。もしも名詞転換動詞 butter の意味が「バターをぬる」ということであれば、(8b)のような put [A] on [B] のような構文の中で用いることが可能はずである。しかし、(8b)のような文は容認されず、実際に用いられるのは(8a)のような with を用いた provide [A] with [B] 型の構文である。したがって、この文は「バターで味付けする」という意味になるという主張である。この由本・影山 (2011)の予測が正

しいとすると、名詞転換動詞 **butter** の意味は、使用用途でかつ行為者の目的とする動作を補助する働きをしていることになるので、**Purpose TELIC** を利用していることになる。

これ以外にも目的役割を使用して意味形成を行っていると思われる種類の名詞転換動詞がある。多くの名詞転換動詞の例を収集し、分類した **Clark & Clark (1979)** の **Location** という分類の一部は目的役割を利用して、意味形成が行われていると考えられる。

(9) jail the prisoner (囚人を牢屋に入れる)

(Clark & Clark 1979: 772)

このような例は、**Purpose TELIC** と **Direct TELIC** とはやや異なる目的役割を持っているように思われる。(9)の例では、名詞転換動詞 **jail** は移動の最終地点、すなわち位置変化の結果として対象が辿りつく場所を意味している。特定の目的を達成するのを手助けする場所への移動ということを考えれば、**Purpose TELIC** の一種と分類することも可能ではある。しかし(7)で挙げたような道具名詞とは、動作主と転換前の名詞の指示対象との関わり方の点で大きく異なる。道具名詞の場合は、動作主が最後までその道具の機能を活かして対象に働きかけを行う。一方で、場所名詞の場合には、動作主が対象となる人や物をその場所に移動させると、後は動作主の働きかけがなくても勝手にその場所が機能を発揮してくれるのである。つまり、一度作成してしまえば、その場所が勝手に機能を発揮してくれるのである。

このような例の意味形成過程における目的役割の関わり方の違いを分析するために、**Pustejovsky (1995)**の目的役割の区別をいったん離れて、名詞転換動詞を分析するための独自の区別を考えていく。本稿では、分析対象となっている名詞が目的役割の情報内でどのような役割を果たすかによって、次の3種類に目的役割を分類する。

主体・動作主関連型 (Purpose TELIC と関連)

目的役割の情報内において、分析の対象となる名詞が、動作の主体となっている。例えば、元の名詞が動作主や、ある動作をする際に動作主を手助けする物になっている場合

被動作主関連型 (Direct TELIC と関連)

目的役割の情報内において、分析の対象となる名詞が、動作の受け手となっている場合

独立機能発揮型

目的役割の情報内において、分析の対象となる名詞が内的な力で機能を発揮する場合

次の第5節では、この区別を利用して名詞転換動詞の意味形成に利用される目的役割の傾向について論じる。

5. 名詞転換動詞に使用される目的役割の傾向

本節では、第4節で提案した3種類の区別を用いて、名詞転換動詞の意味形成に用いられる目的役割の傾向を明らかにする。

5.1. 主体・動作主関連型

主体・動作主関連型は、Purpose TELIC とかなりの部分で共通する。このタイプは、よく名詞転換動詞の意味形成に利用される。まず、道具名詞の例を見てみよう

- (10) mop the floor (モップで床を拭く), sponge the window clean (スポンジで窓をきれいにする), bat the ball (バットでボールを打つ), hammer the nail into the board (ハンマーで釘を板に打ち込む), knife the man (ナイフでその男を切りつける)
- (Clark & Clark 1979: 770)

(10)は、道具名詞の例である。いずれも転換前の名詞の指示対象である道具は、動作主の動作の手助けをしているので、主体・動作主関連型であると言える。

また、主体・動作主関連型の場合には、目的役割内において、動作主の位置を転換前の名詞が占めてしまうことがある。次の職業名詞の例を見てみよう。

- (11) She nursed him hand and foot.

TELIC: [nurse] take care of [someone]

(11)の nurse は人間であるから、その典型的な動作が目的役割には記載される。すると、名詞 nurse の目的役割はその職業の目的である「ナースが～を世話する」ということになる

だろう。しかし、名詞転換動詞になった場合には、「ナースのように世話をする」という意味になる。このように、転換前の名詞が目的役割内の情報内において動作主自身であるとき、名詞転換動詞の意味形成の際には、その名詞は基本的には意味を薄めて様態化しなければならない。次の例はいずれもそうした職業名詞の名詞転換動詞の例である。

- (12) butcher the cow, jockey the horse, referee the game

(Clark & Clark 1979: 773)

(12)の例はいずれも目的役割において、動作主自身の位置を転換前の名詞そのものが占めてしまっているので、転換前の名詞は様態として意味の中に表れている例である。このように主体・動作主関連型の目的役割は、非常によく名詞転換動詞の意味形成によく用いられる。また、動作主が対象にどのように働きかけるのかに関する知識が目的役割から名詞転換動詞に引き継がれることになるので、他動詞として用いられた場合には、元の名詞の目的役割から名詞転換動詞の意味のかなりの部分を予測することができる。

5.2. 被動作主関連型

被動作主関連型は、Direct TELIC と同じである。したがって、すでに(5)で見たように、このタイプの目的役割が名詞転換動詞の意味形成に用いられることは極めて稀である。もう一度、(5)で挙げた例を見てみよう。

- (13) a. *I coffee every night.
b. *I sandwich every morning.

(13a)の名詞転換動詞 coffee が「コーヒーを飲む」、(13b)の名詞転換動詞 sandwich が「サンドイッチを食べる」という意味で用いられることは通常はない。

5.3. 独立機能発揮型

独立機能発揮型には、Clark & Clark (1979)の Location の例が当てはまる。まず、kennel と jail の例を見てみよう。

- (14) a. Kenneth kennelled the dog. (ケネスは犬を犬小屋に入れた)
 b. jail the prisoner (囚人を牢屋に入れる)

(Clark & Clark 1979: 772)

名詞 **kennel** の使用目的は、犬をそこに留めておき、そこをねぐらとさせることにある。そして、(14a)で用いられている名詞転換動詞 **kennel** の意味は「犬を kennel に入れる」という意味である。つまり、動作主である Kenneth が kennel が本来の機能を果たせるように、目的語位置にある the dog に働きかけをしているということになる。また、(14b)の jail の例でも、目的語位置にある the prisoner を jail の領域に移動させ、「罪人を閉じ込める」という機能を発揮できるように手助けしているのである。このように独立機能発揮型の場合、主語となる動作主が、元の名詞の機能を発揮させるために、対象に働きかけをするという意味になるものが多い。Clark & Clark (1979) の分類には、この他に次のような例が挙げられている。

- (15) bed the child, closet the clothes, garage the car, coffin the body, cradle the child

(Clark & Clark 1979: 772)

(15)の例でも、(14)の説明と同じことが言える。それぞれの機能は、bed は「～が寝る」、closet は「衣類を保管する」、garage は「車を保管する」、coffin は「死体を入れておく」、cradle であれば「子どもを寝かしつける」である。そのような機能を発揮させるために、目的語位置にある対象を移動させるという意味になっている。

また、次のような元の名詞が調味料を意味するような名詞転換動詞も、独立機能型の目的役割を用いたものであると考えられる。次の(16)の例を見てみよう。

- (16) sugar the tea (紅茶を砂糖で甘くする), spice the food (食べ物にスパイスで味付けする),
salt the food (食べ物に塩で味付けする)

(Clark & Clark 1979: 770)

このような sugar や spice などといった調味料は、人間によって食べ物に付着することになるが、その後は調味料が勝手に味付けをしてくれるのである。つまり、人間は調味料の移

動を手助けするだけで、味付けの部分に関しては調味料の内的な力によって行われる。目的役割の「味付けする」という機能の主要な部分には人間は関与しないので、独立機能発揮型だと言える。このように、独立機能発揮型も名詞転換動詞の意味形成に関わることができる。ただし独立機能発揮型を利用する場合、元の名詞が機能を発揮するために人間がどのように関わるかに関する知識は、クオリア構造では提供されない。動作主の行動に関する知識は、個々に文脈で補っていく必要がある。これは、動作主の対象への関わり方に関する知識をクオリア構造から導きだす主体・動作主関連型とは異なる部分である。

6. まとめ

本稿では、名詞転換動詞の意味形成に用いられる目的役割の情報に特徴があることを指摘した。目的役割を主体・動作主関連型、被動作主関連型、独立機能発揮型の3種類に分類し、対象となる名詞が動作の受け手となるような被動作主関連型の目的役割は名詞転換動詞の意味形成に積極的に利用することはないということを指摘した。また、主体・動作主関連型と独立機能発揮型の場合で、名詞転換動詞の意味形成過程におけるクオリア構造の関わり方に違いがあることも指摘した。主体・動作主関連型の目的役割が、動作主の動作に関する部分を名詞転換動詞に引き継ぐのに対し、独立機能発揮型の目的役割は動作主がどのような動作をするかについて部分は指定せず、その動作主の関わりの後にものが発揮する機能の部分を名詞転換動詞に引き継ぐということを指摘した。

参考文献

- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark (1979) “When Nouns Surface as Verbs,” *Language* 55,767-811.
影山太郎 (1999) 『形態論と意味』東京：くろしお出版。
Pustejovsky, James. (1995). *The Generative Lexicon*, Cambridge, MA: MIT Press.
Pustejovsky, James. and Elisabetta Jezek. (2008). Semantic Coercion in Language: Beyond Distributional Analysis. *Italian Journal of Linguistics*
由本陽子, 影山太郎 (2011) 「名詞が動詞に変わるとき」, 影山太郎 (編) 『名詞の意味と構文』178-207. 東京：大修館書店.